

ネフスキーの論文「天の蛇としての虹の観念」を読む

宮川 耕次（宮古郷土史研究会員）

はじめに

ニコライ・ネフスキー（1892-1937）晩年のロシア語の論文「天の蛇としての虹の観念」（1934年に発行）の別添＜資料紹介＞翻訳文を、紹介します。¹

ネフスキー生誕120年記念シンポジウムが2012年9月23日、宮古で開催されましたが、その年5月、筆者はこの論文を所蔵する天理大学図書館から取り寄せ、専門に翻訳を依頼したものです。日本滞在におけるネフスキーの本格的かつ重要な論文の一つであり、興味深いものでしたが、ロシア語のためかこれまで接する機会が、ほとんどなかったのです。

ネフスキーは、22年の夏、初の宮古訪問から帰ってから大阪と東京で、この論文のテーマについて講演を行っています。その際、基本的な内容を日本語で披露しています。² 最終論文の完成は32年、論文集の発行は34年です。

今回、この論文についての背景や特徴などを述べてみたいと思います。

1、論文の要旨

この論文については、加藤九祚の完本『天の蛇』³（2011年）にその要旨が、次のように紹介されています。

ネフスキーはこの論文の中で、まず虹という言葉が『倭名類聚鈔』にすでに登場していることをあげ、極めて古いことを指摘し、ついでその語源について考察を加えている。彼は宮古島で虹のことを「天の蛇（tinbau）」と呼んでいることに注目し、こうした観念がインド、

マライ、中国、アメリカ・インディアンなどにも分布していることをあげ、また同じ宮古島群島のタラマ島などでは虹のことを「ヌジ」と称していること、ついで古い民家に住みついた「青大将」のことを「ヌシ」と今も呼んでいることを引き合いに出し、虹の語源が「天の蛇」にあることを論証しようと試みている。なお、この論文の原稿は1922年10月にはすでに完成していたらしく、そのタイプ草稿が天理図書館の「ネフスキー文庫」に入っている。

2、論文の位置

この論文は、ネフスキーが来日してロシアへ帰国した14年間と帰国後3年間の研究活動の中で、変遷しつつ執筆されました。

まず、この論文が載っている『オルデンブルク論文集』とはどのようなもののでしょうか。オルデンブルク（1863-1934）は、東洋学者・インド学者で、ソ連邦科学アカデミー東洋学研究所の所長を務めるなどの重鎮で、ネフスキーと西夏語などについて交流しています。論文集の正式名称は、『オルデンブルグ学術・社会活動50周年記念論文集～1882年から1932年まで』。論文の内容は、インド学や東洋学など自身の専門に関するものなど大小44人の論文が収録されています。

さらに、論文に関わる大まかなネフスキーの活動の経緯を見てみます。

15年 来日 東京滞在

19年 北海道小樽高等商業学校赴任

- 22年 大阪外国語学校赴任
宮古島訪問(1回目)
論文草稿作成
- 26年 2回目訪問
- 28年 3回目訪問
「月と不死」の論文発表
- 29年 ロシアへ帰国
- 32年 論文完成
- 34年 論文集の発行

ネフスキーは19年から、東京高等師範学校に通っていた稲村賢敷から宮古方言を習っていました。⁴また22年に初めて宮古島を訪ねた時から、精力的に方言の字引の作成を始めたといえます。⁵方言の採集やウタ、伝説など広く体当たりでフィールドワークをした痕跡がつかめるようです。虹の語源を探り、本土に帰って講演をしたというほど、言語研究の方法論はじめ日本、アジア、世界に視点を広げてその比較などしていたことが伺われます。

ここで、ネフスキーの研究分野の関心度についての興味深い指摘があります。『宮古のフォークロア』(1978年ロシア語で、98年日本語でそれぞれ発行)を編集した、ネフスキー研究家のリジア・グロムコフスカヤは、「公刊された研究リストから、20代は民俗・民族学的な側面に最も関心があつたことを証明している。」と述べています。さらに彼女は、「ネフスキーは32年に、私の興味は主として言語的な面にあります。—そしてすぐ後に民俗学をあげている。」と指摘。つづけて「彼の研究の方向は主として西夏言語にあつたことを忘れてはならない」と強調しています。⁶

その一方で、32年ネフスキーは宮古の方言の諸問題を解決するための言語調査、および資料送付してくれる活動拠点を作る、という出張旅行を計画しましたが、実現していません。⁷

ネフスキーは、恩師であるシュテルンベルグから、民族・宗教を真に学ぶためにはその言語を学び相手の微妙な心理を理解することが大切、と教示されたのをよく理解し、自ら実践したようです。その方法を「民族学的言語学」的方法と呼んでいます。⁸

3、論文成立の背景

この論文をめぐって、多くの学者たちの研究活動も関わっており、また論文も複雑な経緯をへて成立しています。これらの事情を整理してみました。

(1)「虹」に関する日本の研究動向

- 17年 虹 東条操
- 25年 虹考 宮良當壯
- 30年 語音変化に関する研究
柳田國男
- 33年 虹の語源説に就いて
宮良當壯
- 48年 虹の語音変化など
柳田國男

(2)虹=蛇説をめぐる行き違い

宮良は、「虹考」という論考を25年『国学院雑誌』に発表します。東条の文章「虹」の語彙に啓発されたといえます。

東条操が31年、「虹という言葉が蛇に関係するとの説は、ロシア人のネフスキー氏や宮良氏によって説かれ、最近柳田先生がそれを補われて御発表になったことがあります。」と書いた記事⁹を宮良が読み、意外に思ったといえます。虹の語源についての蛇説について自分が初めてだと思っていた宮良は、東条や柳田に照会します。すると、東条からはネフスキーは口頭で行ったことを知らされます。しかし、柳田からは「虹考」の論文はネフスキーにヒントを得て書

いたと云うではないか、という意味のことを言われ、ショックを覚えます。

ところが、東京では柳田らが主宰する南島談話会が行われたが、常連の宮良はその時またま出席せず、聞いていなかったようです。後日、宮良は記事¹⁰で弁明し、柳田らの誤解も解消したようです。¹¹

ここで、34年発行の論文集に収録されたネフスキーの論文についての、研究者たちの言説は、加藤九祚とエフゲーニー・バクシェエフに見られます。前者は、本論考の「1、論文の要旨」で取り上げました。後者の発言は、次のとおりです。¹²

日本ではネフスキーが《虹》(ニジ)の語源は《主》(ヌシ)であると論証したという誤解がある。実は、彼は《ニジ》の語源は《*norozī*・*norozī*》(ヌルズィ・ノロズィ)(蛇・蚯蚓・鰻の意)であると書いてある。

虹の語源が主であると唱えたという誤解がある、という具体的な発言の指摘はありませんが、ただ柳田と宮良との発言の中での食い違いが指摘できそうです。まず、柳田の記述の一部です。

¹³

現在でも尚行われて居る池沼などのヌシという語、即ち水中の霊物として、蛇や鯰や大蛇の画などを継ぎ合わせて、我々が想像してみた畏ろしきものゝ名が、元は此ニジといふ語と一つであって、人は其霊物が現れて虹となるものと信じて居たらしいということは、夙に、ニコライ・ネフスキー君がこれを唱へ、後に宮良當壯君が承継いで敷衍して居る。

これに対し、宮良は次のように反論しています。¹⁴

私は虹に関して、「池沼のヌシ(主)」と云う語に同じであるとか、或いは又、水中の霊物が現れて虹になると信じてゐたと云うようには少しも考へてゐなかつた。ネフスキー先生の考へ方と私のそれとは此点に於て全然相違してゐると云へよう。

バクシェエフの指摘は、柳田と宮良とのこのやりとりがある程度関わっているのではないのでしょうか。

ネフスキーの34年の論文では、虹の語源が蛇などにあることとともに「主」についての言及もあります。要は当時の日本の研究者たちが、22年の講演の内容のみに基づいて言及しており、34年の論文に触れる機会がなかった、ということです。

さらに、ネフスキーは、34年の論文をまとめるにあたっては、22年から32年までの柳田國男、宮良當壯、東条操らの論文や資料も引用していることが明らかです。¹⁵

4、天理図書館の活動

天理大学では、創立90周年を記念して2015(平成27)年に大がかりの記念行事を催していますが、そのうち11月20日から29日まで特別展『悲劇の天才言語学者ネフスキー～自筆資料に見る軌跡～』も開催されました。

展示内容は、「月と不死」の露文タイプ草稿や宮古島方言辞典の草稿ノート、琉球の古語辞書『混効験集』の写し、アイヌ関係、柳田國男宛の書簡など。これらの資料は、ネフスキーが29年に帰国した際にイソ夫人の実家に残していたものです。

さらに27日には、「天理図書館とネフスキー」三濱靖和、「ロシアにおけるネフスキーの評価の変遷」エフゲーニー・バクシェエフ、「自筆資料から見るネフスキーの人的ネットワーク」生田

美智子の三氏が講演しています。加藤九祚氏らも特別ゲストとして出席しています。

また、天理図書館報『ビブリア』146号(2016年)では、ネフスキーの論文「天の蛇としての虹の観念」の草稿などが、初公開されました。そのあらまは、次の通り。

- (1) 34年版決定稿の翻訳
- (2) 22年版の草稿訳
- (3) 同翻刻

同図書館の活動によって資料の公表が進んでおり、今後さらにその活用が期待されています。

5、論文についての一考察

ここで、ネフスキーの論文の特徴について、三点ほど挙げます。一つは虹という言葉は日本最古の辞典にも記され古いものであること、言語学者などが京都方言は不変だという先入観が大きく、長らく解明が進まなかったことなど、二点目は、柳田やソビエトの言語学者・マルらの言語理論に基づき、あらゆる言語や民族において、単純・無垢なものではなく、すべて混交している、虹という言葉も多種多様に変化してきた、三点目に、虹を「天の蛇」としてとらえるのは、宮古だけでなく世界の民族に見られ、アジア・アメリカ、オーストラリアなどから広くその事例を挙げていること、です。

ネフスキーは、論文のまとめとして、およそ次のように述べています。

現代日本の共通語における虹という言葉の起源は、いくつかの方言で母音の同化が広がった結果、[ninzi] → [nu:zi] → [nizi] と変化した。そして、あらゆる言葉の集合体は、「這うもの」(へびを意味する)の観念、蠕虫状のもの(ミミズを意味)の観念、「滑りやすいもの」の観念、「細長いもの」の観念を受け

ており、すなわちそれらはへびの観念を如実に表す観念である、としています。

ネフスキーの虹の語源説は、結論のみでなくその有機的な背景や理由などを広範に提示しているところに、際立った特徴があるといえます。

おわりに

ネフスキーの帰国後の研究活動は、これまであまり語られたことがなかったようです。

「民族学的言語学」の方法論を取り入れたネフスキーは、言語と民俗・民族とが全く別個のものではなかったのですが、あえて30年代にはネフスキーは言語学を優先していたようです。生涯で重要な西夏語に次ぐ、宮古語そして琉球の言語にも特別な思いをもち続け、出張旅行も計画していたほどです。

今回の論文を契機に、ネフスキーの研究におけるこれまでの民俗的な「若水の研究」やアーク、方言ノートなどに加え、言語における語源などに関する領域についての研究も課題として上ってきたようです。

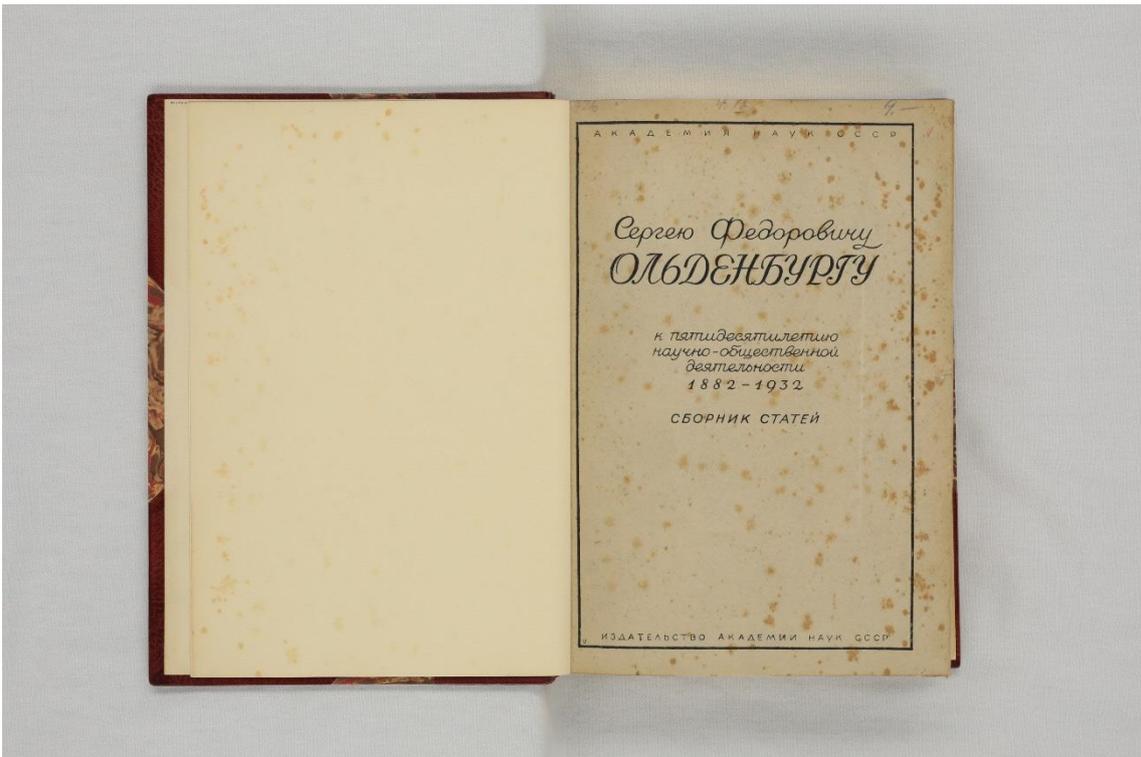
また、ネフスキーが計画していた言語研究の中身についても、具体的に検討していく時期に来ていると感じます。

謝辞 今回論文作成に当たり、多大なご協力をいただきました天理大学・天理図書館と国立民族学博物館に、心からお礼を申し上げます。

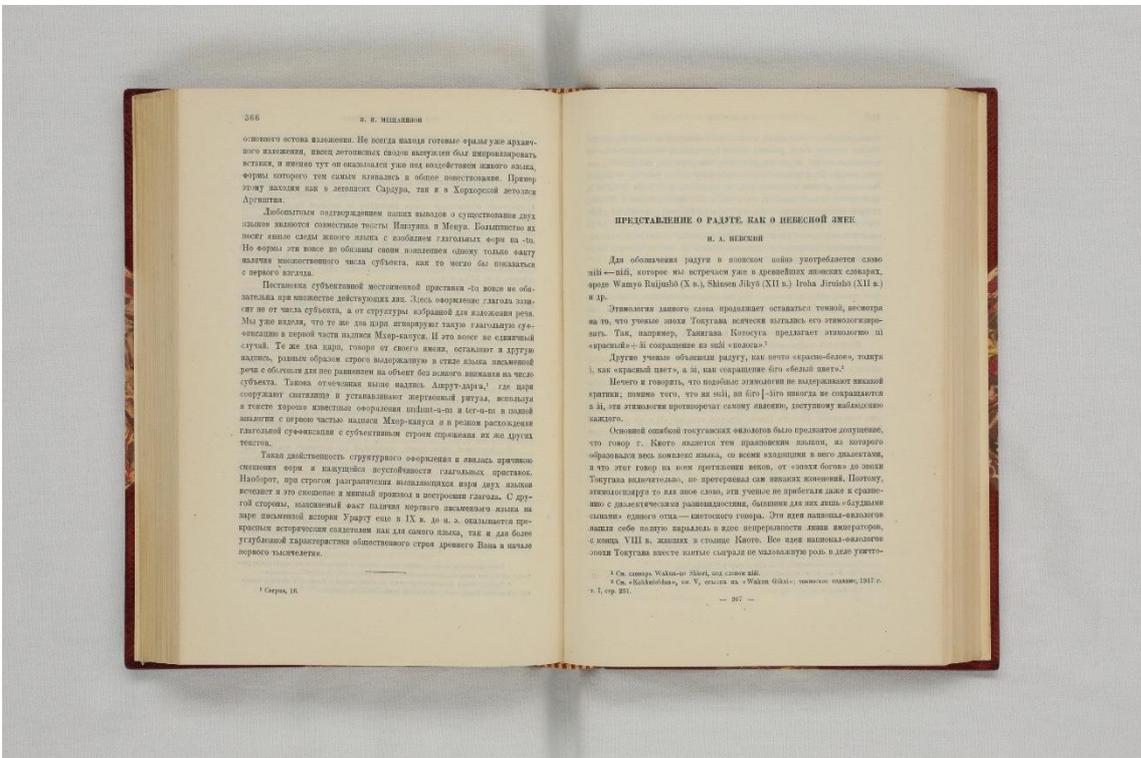
¹ 別添<資料紹介>「天の蛇としての虹の観念」日本語版(翻訳タイトルは「虹に対する天の蛇のごとき概念」であるが、すでに、加藤九祚が訳した「天の蛇としての虹の観念」が定着しており、上記のタイトルに統一した)

- ² 前掲資料 10 頁脚注
- ³ 加藤九祚 2011 年 「帰国後の活動」 完本『天の蛇』（初版 1978 年） 河出書房新社 243 頁
- ⁴ 加藤九祚 前掲書 120～121 頁・316 頁
- ⁵ 加藤九祚 前掲書 149 頁
- ⁶ リジア・グロムコフスカヤ 1998 年 「宮古のフォークロアの研究者—N・A・ネフスキー」 『宮古のフォークロア』（ロシアで 1978 年発行） 砂子屋書房 358 頁
- ⁷ グロムコフスカヤ 前掲書 357-358 頁
- ⁸ グロムコフスカヤ 前掲書 359-360 頁
- ⁹ 東条操 1931 年 「方言」 『ことばの講座』
- ¹⁰ 宮良當壯 1933 年 「虹の語源説に就いて」 『音声学協会々報』に掲載、1981 年に『宮良當壯全集』13 に収録 第一書房
- ¹¹ 柳田は、30 年の時点で「ネフスキーがこれを唱え、後に宮良當壯君が承継」としていた論述（「語音変化に関する研究」）を「夙にニコライ・ネフスキー君がこれを唱へ、又宮良當壯君も別に之を證明し敷衍して居る」と修正する。1948 年 「虹の語音変化など」 『西は何方』 甲文社 169 頁。
- ¹² エフゲーニ・バクシェエフ 2012 年 「N・ネフスキーによる宮古島調査の成果」 『ニコライ・ネフスキーの沖縄・宮古に関する民族学的研究』 沖縄民俗学会
- ¹³ 柳田國男 1930 年 「語音変化に関する研究」 『音声の研究』第3集 この記事の一部が『宮良當壯全集』13 に所収
- ¹⁴ 宮良當壯の前掲書
- ¹⁵ <資料紹介>ネフスキーの34年論文の脚注で触れている。

図版



『オルデンブルク論文集』(1934年)の表紙(天理大学図書館提供)



ネフスキーのロシア語論文「天の蛇としての虹の観念」のI頁目(右)(天理大学図書館提供)

<資料紹介> ニコライ・ネフスキー「虹に対する天の蛇のごとき概念」

ソビエト社会主義講和国連邦科学アカデミー

セルゲイ・フョードロヴィッチ・オルデンブルク

1882年から1932年までの
50年間にわたる社会科学分野での取り組み

論文集

ソビエト社会主義講和国連邦科学アカデミー出版

虹に対する天の蛇のごとき概念

ニコライ・ネフスキー

日本の共通語における「虹」の解説には [nizi] の語源である [nizi] という言葉が用いられている。それは、例えば『和名類聚抄』(10世紀)、『新撰字鏡』(12世紀)、『色葉字類抄』(12世紀)など、日本最古の辞典においても既に記されている。

この言葉の語源は、江戸時代の学者があらゆる方法でその語源を特定しようと試みたにも関わらず、未だ曖昧なままである。例えば谷川士清は、[nizi] の語源は「美しい」を意味する [ni] と「筋」を意味する [suzi] の短縮形である [zi] とが組み合わさったものであると定義している。¹

その一方で、「虹」の語源は単に「赤と白」、すなわち「赤色」を意味する [i] と「白色」を意味する [siro] の短縮形 [zi] であると説明する学者もいる。²

その他にも語源に関する諸説があるのだが、それらはすべて、[zi] は [suzi] や [siro/siro] の短縮形でないばかりか、それぞれの言葉の起源や説得力のある研究結果とも矛盾するのではないかという批評に耐えうる説ではなかった。

江戸時代の文献学者が犯した根本的な過ちは、先入観による仮説であった。それは、京都の方言こそが日本古来の言語であり、言語の集合体全体がそこから形成され、あらゆる方言を取り込みながらも、神代の時代から江戸時代に至るまで何世紀にもわたり、その方言はまったく変化していないというものだった。そのため当時の学者たちは、どのような言葉の語源を定義する場合でも、まるで一人の父親に対して「放蕩息子たち」がいるかのような京都の方言の多様性を比較することすらしなかった。日本語文献学者のこのような考え方は、8世紀末から京の都で暮らす天皇家がその後も脈々と続いていくであろうという概念と同様の、永続性を持ったものであった。江戸時代の日本語文献学者のあらゆる考え方は、封建社会的な秩序の廃止や君主制を実現する上で非常に重要な役割を果たした。さらに明治維新後においては、その考え方は新たなブルジョア社会によって丸ごと受け入れられ、支持基盤を維持したまま姿を変えずに帝国主義の時代に移行していった。さらに、江戸時代の学者の権威を乱すことは、つい最近まで冒涇とも受けとめられかねない行為であった。日本は様々な分野で欧米文化を急速に吸収しながらも言語学分野に限っては停滞していたのだが、その停滞は江戸時代から引き継がれた考え方によって起きていたことは、部分的ではあるが

¹ 『和訓栞』、「虹」の項

² 『滑稽雑談』第5巻(初版)、「和訓義解」、東京、1917年、231頁

説明できるのではないだろうか。しかし、経済危機によって日本の帝国主義に疑問が投げかけられているここ数年において、侵されずに守られてきた江戸時代の日本語文献学者の権威が遂に揺らぎだしている。

仮に、先に紹介した [nizi] という言葉の語源を説いた学者たちが、京都の方言こそが日本古来の言語であるという先入観にとらわれていなかったならば、彼らは [nizi] よりも言葉の意味としては遥かに古い [nuzi] およびそれが変化した [nuzi] という言葉に多少なりとも注意を払っていたに違いない。なぜならば、その言葉は日本最古の和歌集である『万葉集』（現在の形に完成したのは9世紀初頭）に登場しているからである。

江戸時代の著名な学者である本居宣長は、[nuzi] という言葉が [nizi] よりも語源が古いと認識していたのだが¹、その言葉は和歌集の中でも上毛野国（現在の上野国）で詠まれた詩歌のみに登場しているため、現代の研究者たちは [nuzi] は [nizi] の方言の一種であると見なしている。²

日本の著名な民俗学者である柳田國男は、言葉の起源に関する問いかけに対して、次のように説いている。「今も昔も、辞書というものは決してひとつの形に留まったことはなかった...それは、万葉集やその他の古代文献から今に伝わる言葉ひとつひとつにも言えることである...ただ一つ確かなことは、言葉というものはあらゆる時代にあらゆる場所で使われているのだが、だからといって言葉の形が太古の時代から全く変わっていないということにはならない。」³

特に我々にとって興味深いのは、彼が「虹」について次のように説いていることである。「[nizi] (虹) という言葉ひとつを取ってみても、我々がこの日本列島に住み始めて以来、その音声的構造は実に多種多様に変化してきた。」⁴

このような自らの見解に基づいて、柳田は言語に関する次のような新たな学説を確立しようとしている。

¹ 『古事記伝』、東京、1921年、2052頁

² 折口信夫『万葉集辞典』、東京、1919年、187頁

³ 柳田國男「語音変化に関する研究」—『音声の研究』第3巻、1930年、東京、6頁

⁴ 柳田國男前掲書中、13頁

このような自らの見解に基づいて、柳田は言語に関する次のような新たな学説を確立しようとしている。「あらゆる言語、あらゆる民族、あらゆる部族において (さらにその誕生の起源にさかのぼったとしても)、単純なものや無垢なもの、または我々の専門用語でいうところの「混交」していないものなど何一つない。」¹

現代の日本の方言に目を向けてみると、その原形を留めていると考えられる言葉など一つも無く、むしろあらゆる言葉は「混交」によって発生したという事実を証明する例は、先に紹介した [nizi] と [nuzi] の他にも数多くある。ここで、東条操教授によって初めて編纂され、最も完成度の高い方言辞典が現代日本語における「虹」という言葉の語源を理解するのに役立つのである。²

柳田は先に紹介した研究において、「虹」を意味する現存する言葉の地理的な広がりを調査した結果、日本全体を次のような地域に分けている。

1. [nozi] 地域 ([noʒi], [noʒi], [no:zi] というパターンもある)
2. [nezi] 地域 ([ne:zi] というパターンもある)
3. [nizi] 地域 ([ni:zi], [ninzi] というパターンもあり、おそらくそこから派生して鹿児島
の [niʒi] や豊後の [nir'i] となった)
4. [m'o:zi] 地域 ([m'o:ziŋ], [me:zi], [m'o:zi], [m'o:zo:] というパターンもある)
5. [ʒu:zi] 地域 ([ʒu:zi], [ju:zi], [ru:zi] というパターンもある)
6. [b'o:zi] 地域 ([b'o:zi], [b'o:bi], [b'o:bu] というパターンもある)
7. [nuzi] 地域 ([nu:zi], [n'u:zi] というパターンもある)³

さらに、琉球諸島および琉球諸島と九州との間に位置する島々においては、以下のとおり北寄りの地域では [n] で始まる言葉が広く使われており、南寄りの地域では [m] で始まる言葉が広く使われている。

- [no:zi] (沖永良部および徳之島)
- [nu:zi] (首里および那覇)
- [nu:ziŋ], [nu:giri] (七呂村)
- [no:gi], [no:giŋ] (徳之島)
- [no:gi], [no:ki], [no:ku], [no:k], [no:giri] (奄美大島)
- [mo:gi], [mo:gʷ] (石垣島)
- [mo:kʷ] (小浜島)
- [mu:zi] (黒島)
- [no:ziŋ], [tin-nu-mu:zi] (新城島)

¹ N. Marr 「言語学と唯物論」—『母国語—文化的高揚の強大な推進力』、東西言語文学比較研究大学、「ブリボイ」出版、1929年、39頁

² 東条操 「虹」—『共同研究』(第4版)、606~608頁

³ 東条操前掲書中および柳田國男前掲書中、7~9頁

このような混交された多くの言葉一つ一つを分析するよりも、ましてやその中の一つの言葉の語源を深く追究よりも、まずは現代の日本の言葉や伝説などに残っていたり、古文獻に記されていたりするような、日本人や琉球人の「虹」に対する民族的概念に注意を払うべきである。そうすることによってその言葉自体の変遷を理解でき、さらには前述したような「虹」に対する様々な表現を発生させた概念をも理解できるのである。

はじめに紹介するのは、1775年に編纂された日本最古の方言辞典の一つである『物類称呼』の記述である。それによると、尾張の国の人々は虹のことを [nabezuru] と呼んでいたようだ。それは現代の方言においても「鍋 [nabe] の取っ手 [curu]」を意味する [nabecuru]、[nabenocuru]、[nabencu] といった形で存在し続けている。¹

虹を「弓」に例える概念は、多くのヨーロッパ言語やセム語においても見受けられる。さらに興味深く、しかし同時に理解しづらいことでもあるが、肥後地方の天草諸島には、虹を指す [gagoši] という言葉がある。²

また美濃地方においては、その言葉は大きな籠を用いて冬の池で行う漁のことを指す。³ 柳田が推測するところでは、[gagoši] は「悪魔」を意味し、泣く子を驚かすのに使われる方言の [gaŋozi] と同じ起源を持つのだという。琉球諸島の八重山島嶼群に属する与那国島（その地方では [dunan] と発音される）の人々は、虹のことを「飲み込みの雨」を意味する [aminum'a] と呼んでいる。

私が1922年の8月に宮古諸島（その地方では [m'a;ku] と発音される）を初めて訪れたとき、まず私を驚かせたのは [timbav] ([čimbav]、[timpav] というパターンもある) という言葉だった。興味深いことに、宮古諸島の住民の大多数は虹のことをそう呼んでいたのだ。

その言葉を文字通り訳すと「天の蛇」である ([tiŋ] は「天」の意味で、日本語の [ten] は中国語の [t'ien] に由来する。[pav] は「ヘビ」の意味。日本語で [hebi]、[hami] は「ヘビ」の意味で、大阪の方言では [hame] が「クサリヘビ」を指し、大和の方言では [habi] が同じく「クサリヘビ」を指す。首里および那覇では [habu] は「琉球ハブ」（学術名：*Trimeresurus ryukyuanus*）を指す。日本語の [hau] は「這うこと」を意味する）。おそらく宮古諸島の人々は、この「天の蛇」は時折地上に姿を現し、人々に災いをもたらすのだと考えていたようだ。その証拠に、[ffisiti mudusicka:timbavndu makaiŋ]（逃がして返さないと、天の蛇が巻きつくぞ（つまり、罰が当たる））という言い伝えがある。この言い回しは、誰かに何かを貸した子供が、しばらく経ってからそれを返して欲しいときによく使う俗信である。

¹ 柳田國男前掲書中、12頁

² 柳田國男前掲書中、12頁

³ 「和訓栞」—『大日本国語辞典』、ただし著者所有の本辞典最新版においては当該の言葉は掲載されていない

様々な民族の伝承や信仰を研究した結果、分かったことは、虹を「天の蛇」と信じる概念は宮古地方の人々に特有の考え方ではなく、世界中の様々な民族によっても広く信じられているということである。それは、自然界のあらゆる現象は地上に生息する何かしらの動物で表現されるというアニミズムの確かな名残であろう。虹をへびと同一視する要因の一つは、どことなく蛇に似た虹の形や外見があるのだと思われるが、その一方で、雨上がりの太陽と同時に姿を現す虹を、陽に当たるために穴から這い出てきたへびたち (一度となくこの目で目撃したことがある) になぞらえているようにも考えられる。

これに似た概念が日本以外にも存在するという事は、以下に紹介するいくつかの有名な例によっても証明されるであろう。

インドのベンガル地方・チョタナグプール高地に住む農耕民族のムンダ人は、水へびと虹をともに“lurbing”と呼んでいる。ことさら虹の語源に関しては、次のような言い伝えがある。世界が創造されて間もなく、人間は思いやりもなくわがまま放題を始めた。それを見た造物主の Sing-Bonga は、すべての人類を創り直すことを決意し、天より火の雨を降らせた。その雨は、tiril の木の下に逃げ延びた一組の兄妹を残し、すべての人類を絶滅させてしまった。その後、火の大雨を止めるため、Sing-Bonga は自らの魂を込めた lurbing というへびを創造し、虹の形に変わって天に舞い上がっていった。そうして遂に雨は止んだ。このような伝説を信じるその地方の人々は、虹を見ると「もう雨は降らない、lurbing が雨を止めたから」と語るのである。¹

同様の考え方はマレーシアにもある。例えばペナン島の人々は、虹のことを「danu のへび」を意味する“ular-danu”と呼んでいる。一方、セランゴールの人々は「飲み込みのへび」を意味する“ular minum”と呼んでいる。²

また、中国においても虹をへびや竜になぞらえる概念が存在する。そのいくつかは中国の伝説に起源をなすものであるが、一方で、象形文字の表現において「虹」という文字には爬行動物を意味する「虫」偏が付く。

¹ Frazer 『Folk-lore in the Old Testament』 (初版)、ロンドン、1919年、196頁

² Skeat 『Malay Magic』、ロンドン、1909年、14～15頁

さらにはモンゴルにおいても、このような概念とは無関係でないと思われる伝承がある。例えばホリ・ブリヤート族には、次のようなあるラマ僧の言い伝えがある。彼は自分が死後に人喰いへびになるとわかっていた。多くの人を食べたへびはその罰として地獄に落ちる運命にあるため、彼は一人の弟子に剣を授け、自らの死後に最初に遭遇した人喰いへびを殺すように言い残した。そしてラマ僧の死後すぐに、その人喰いへびが現れた。弟子は師匠からの言葉を思い出し、剣でそのへびを切りつけたところ、へびから五色の虹が天に昇り、ラマ僧は仏像になった。¹

同様の概念はアジアだけに留まらない。アメリカにも次のような伝承がある。

「インディアンに伝わる偉大なる伝説のへびは、天の生き物でもあり、水の生き物でもある。おそらくそれは擬人化された虹や稲妻に過ぎないのだが、それ故に天や水と連想してしまうのであろう...ソソニ族の人々は虹を巨大な天の蛇かのごとく考え、ナイアガラの滝の上に現れる虹を見れば、その滝を巨大な蛇の住みかと考えるかもしれない。」(アレクサンダー著)²

さらにアレクサンダーは、「ソソニ族は、氷でできた大きな屋根だと考えていた天空に虹が昇ると、それを巨大な蛇が這っているのだと考えていた」とも記している。³

また、虹をへびになぞらえる概念は北オーストラリアのアヌラ地方の人々が用いる雨の呼称にも見受けられる。例えば祈祷師が雨乞いをするとき、へびを捕まえ、それを掴んだまましばらく水中に沈めて殺し、地面に置く。その後、草束を手にとって、おそらく虹を表すのであろうアーチ状に曲げ、それをへびの上に置く。そして儀式の最後に人々はこのへびを見下ろしながら、祈祷師の願いとおりに必ずいつかは恵みの雨が降るようにと歌を歌うのである。⁴

もし仮に民俗文学や伝承文学について綿密に調査すれば、前述したような実例は世界の様々な地域からいくらかでも見つけることができるであろう。またそうすることによって、多くの民族それぞれに固有の、虹を蛇になぞらえるアニミズム的表現が、それぞれの民族文化の特定の段階で見られることも示されるはずである。ちなみにここで特筆すべきは、雨乞いの祈祷には生きたへびを使う場合(アメリカやオーストラリア)と、へびや竜の描写を用いる場合(アジア)があるという点だ。

¹ A. Rudnev 『ホリ・ブリヤートの方言』(第3版)、サンクトペテルブルク、1913～1914年、73頁

² H. B. Alexander 「北アメリカ」—『The Mythology of All Races』第10巻、ボストン、1916年、300頁、注釈50

³ 同書、139頁

⁴ E. O. James 『Primitive Ritual and Belief』、ロンドン、1917年、102～103頁

ここで紹介したすべての儀式の根底には、雨の「主」であると見なされているへびや虹の力を呼び起こすための、暗示的な魔術が存在しているように思われる。

虹をへびに喩えることは、日本古代の年代記にも記されている。その一つである『日本紀』には、雄略天皇の治世3年目(西暦459年)の出来事に関して、五十鈴川の上流で自殺した栲幡皇女を探しているときの様子が次のように記されている。「そして川の上流に、25~30尺以上にもなる、まるでへびのような虹が現れた。虹の下を掘り起こすと神鏡が見つかった。」

また、12世紀の有名な和歌集には西行法師の次のような短歌が収められている。「高野への巡礼の最中、葛城川の上に虹が昇った：

さらにまた	また新たに
そり橋わたす	反り橋が架けられているような
心地して	思いがする
をぶさかかれる	緒房が懸かっている
かつらぎの嶺	葛城の山に」

このように「緒房」を虹の比喩に使用する例は他にない。そのため柳田は、この言葉の最初の音節は [na] の書き間違いであって、正しくはアオダイショウ(学術名: *Elaphis virgatus*) の方言である [naɸusa] または [nabusa] に違いないと推測している。¹

話を琉球諸島に戻すと、八重山諸島に属する小浜島の人々は虹のことを [ćine:-mimanci] (「天のミミズ」を意味する [ćini-ga mimanci] が語源で、[ćinj] の語源である [ćini] は「天」の意味、[mimanci] は日本語で [mimizu] や [memezu] と発音される「ミミズ」の意味) と呼んでいる。八重山諸島に最も近く、宮古諸島に属する小さな島の多良間島に住む人々は、虹のことを [timbav] とは呼ばず、本州の人々と同様に [nu:ɕi] と呼んでいる。つまり、言葉の発音においては琉球(すなわち、首里の発音)の [nu:ɕi] や日本の方言にある [nusi]、[nu:ɕi]、[n'u:ɕi] などに近いのである。

また新城島では、[nu:ɕi] や [ćine:-mimanci] といった言葉との親近性の影響であろう、元来「天のへび」や「天のミミズ」の意味を持っていた [tin-nu-mu:ɕi] という混種結合の言葉が発生した(「ミミズ」を意味する [mi:ɕa] や [mæ:ɕa] は、九州と琉球諸島の間には浮かぶ奄美大島のいくつかの村落で用いられている)。

¹ 柳田國男前掲書中、12頁

前にも述べたように、宮古島で虹の表現に使われている [timbav] という言葉は多良間島では使われていないのだが、宮古島でも虹のことを [timbav] とは言わない地域がある。

例えば、狩俣(カズマタ)村では虹のことを [o:nazi] と呼ぶ。この言葉は、平良やその他の地域(例えばクブラ村)では、前述したアオダイショウ(学術名: *Elaphis virgatus*)を指す言葉である。同じく宮古諸島に属する伊良部島においても、また、石垣島(八重山諸島のひとつ)においても、アオダイショウは [aunazi] と呼ばれている。さらに、八重山諸島の他の島々では [^haunaza](新城島)、[aunazi] または [aunazipan](黒島)、[aunanci](小浜島)、[o:nazapaku](波照間島)、[bo:naçi](西表島)¹などとも呼ばれている(語尾の [pan] および [paku] は宮古島で「ヘビ」を意味する [pav] と同じ)。これらの呼称の語頭にある [au-]、[o:] および [bo:] は、日本語の「青緑色」を意味する [ao] ([awo] が語源)と同じである。[ao] は日本語の [aodaišo:] にも含まれており、それは文字どおり「緑色の大將」を意味している。事実、このヘビはその他の日本のヘビとは異なり、青みがかった深緑色がその特徴である。

先に紹介した、虹のことを [nu:çi] と呼ぶ多良間島には、[o:nu'zībo:] ([bo:] は「ヘビ」を意味する [po:] が語源)と呼ばれるヘビがいる(通常、琉球の方言では混合語に含まれる長母音は一つまたは二つの半長に短縮される)。前述したアオダイショウ(学術名: *Elaphis virgatus*)の呼称とこの [o:nu'zībo:] を比較すると、[nazi] は [nu:çi] の別の言い方の方言であることがよくわかる。このような [u] と [a] の交替は、宮古地方の一部の方言からだけでも見て取れる。例えば、「卵」を意味する [tunuka] (伊良部島佐和田村) と [tunaka] (平良)、「早朝」を意味する [stumuti] (平良) と [stumati] (島尻村)、「ホテル」を意味する [ju:mbu] (佐和田村) と [ja:mbu] (平良) などがある。

伊良部島の佐良浜村の人々は、ヘビ全般を単に [hau] (平良の [pav] と同じ) という言葉で表すこともあるのだが、さらによく使われるのが [haunazi] という言葉で、さらに虹は「天の大蛇」を意味する [tinnu ha:unazi] ([ha:unazi] は「大蛇」を意味する [uhu haunazi] が語源)と呼ばれている。ちなみに、同じ村では「天のヘビ」を意味する [tinnu hau] という言葉が「水死」の意味でも使われている。

先に紹介した [haunazi] という言葉は、おそらく二つの類義語から生まれた混合語である。

沖縄本島の首里や那覇では、アオダイショウ(学術名: *Elaphis virgatus*)は現地の言葉で「緑色のウナギ」を意味する [o:nnazi] または [o:nnaza] と呼ばれている。「ウナギ」を意味する [nnazi] は、日本語の [unagi] (地方の方言では [mnagi]) や宮古島の [mnag^h] (平良) と同じである。

¹ 宮良當壯前掲書中

国頭郡の名護村ではへびを [o:nag'a] と呼ぶのだが、興味深いことに奄美大島でも [o:nag'a] (島北部)、[o:naga] (島中部)、[o:naki] (島南部) と呼ばれている。これらの言葉の語頭の [o:] は「緑色」を意味する。後半部分は「細長い」を意味する琉球地方の方言共通の語根 [nag-] が変化した形で、「何か細長いもの」、特にこの場合はへびを指すのである。ここで特筆すべきは、日本全国でへびを指すのに用いられる言葉で、「細長い虫」や「細長い爬行動物」を意味する [naja-musi] である (中国北部にこれと全く同じ語源かつ同じ意味の [tʂ'ɑŋ- tʂ'ʊŋ] がある)。

奄美諸島に属する他の島々では、アオダイショウ (学術名: *Elaphis virgatus*) を指す言葉には [a] でなく、[o:nug'a] (徳之島)、[o:nuʂi] (与論島)、[o:nuru] (沖永良部)、[o:nura:] (喜界島) というように、母音の [u] が含まれている。殊に喜界島では、虹のことを [tećinuri] と呼んでいる。¹

再び日本本州に目を向けると、アオダイショウを指す言葉には、[aodaišo:] 以外にも先に紹介した [naʃusa] (または [nabusa]) という言葉がある。それは [aonabusa] としてよく使われているが、その他にも [aonoʂi] (越後地方岩船郡)、[a^ooroʂi] (信濃地方小谷)、[aonorosĩ] (岩手県) などの形がある。

[noʂi] という言葉 (前述の [aonoʂi] の中に含まれる) の音感は、日本の共通語で「主」を意味する [nuʂi] に近い。また、神々に仕える川や沼、湖の「主」は、ほとんどの場合へびを意味している。人の住居に住み着きながらネズミなどを退治してくれるへびは、「家の主」を意味する [ie-no-nuʂi] と称され、それ故にへびを駆除することは罰当たりであると考えられている。

そのような「主」のために、多くの家々には小さな神棚が設けられ、そこには米などの供物が絶えず供えられている。また、英語で言うところの「Boss」と同じ意味を持つ日本語の俗語 [taišo:] ([aodaišo:] 中に含まれる) にも「主」の意味があると思われる。

[aonorosĩ] または [aonurusĩ] という言葉は、おそらく三つの要素で構成されているようだ。その三つとは、1) 「緑色」を意味する [ao]、2) 「滑りやすい」 (例えば、へびやウナギなどの様子) と「湿った」を意味する [noro-] または [nuru-]、3) 生き物を表し (「~である」や「生き物」の意味を持ち)、日本の共通語や宮古地方および八重山地方の方言に見られる接頭辞 [-su] や首里や那覇で話されている琉球語の接尾辞 [-si] に相当する、接尾辞の [-sĩ] である (例えば、宮古地方で「酒好き」や「大酒飲み」のこと意味する [num-su]、日本語で「カラス」を意味する [kara-su]、「キリギリス」を意味する [kiriŋiri-su]、「キジ」を意味する [kiŋi-su]、「男性」を意味する [o-su]、「女性」を意味する [me-su] などに見て取れる)。このように、その言葉全体では「緑色の滑りやすい生き物」という意味を持っているが、特にその中でも「滑りやすい生き物」とは、へびやウナギ、ミミズを指している。

¹ 宮良當壯は先に引用した研究において、虹の説明に [é:ri:nu:ru:] という言葉を引用している。

地方によっては [kiɲiʃi] と称され、現代の共通語においては最終的に [kibi] という言葉になった [kiɲisu] という古い言葉があるのだが、それと全く同じように「ヘビ」(または「ミミズ」)を意味する [norosi] という言葉は、日本の東北地方では [no^hʃi] → [no:ʃi] → [no:ʃi] → [noʃi] (「虹」の意味) と形を変えていった。

このような言葉の変遷に先立って、[ro] の音節が [no] の音節によって置き換えられたことは明らかである。さらにそれに続いて、おそらくアクセントの欠如に起因するものであるが、母音の脱落が起こった。[r] と [n] の入れ替わりは、日本の琉球地方の方言においては珍しいことではない。例えば宮古島の平良では、「場所」のことを [tukuru] (日本語で [tokoro]) と言うのに対し、佐和田村 (伊良部島) では [tukunu] と言う。またその村では、日本の共通語で「そろばん」を意味する [soroban] (中国語の [suan-pan] が語源) のことを [sunuban] と呼ぶ。沖縄本島における方言では、「石ころ」のことを意味する [iʃiragu] は [iʃinagu] に替わり、さらに日本古代の年代記によると、現在港がある敦賀のことを「ツヌガ」 ([tunuga]) と呼んでいた。

[norosi] から方言の [noʃi] が生まれたように、他の方言では [nuruʃi] が [nu:ʃi] → [nu:ʃi] → [nu:ʃi] → [nuʃi] と形を変えていった。[nu:ʃi] という言葉の語尾にある狭母音の影響により、語頭の子音文字は類似する中部舌背音によって発音され始めた。その結果、[n^hu:ʃi] や [n^hu:ʃi] (徳島県や大分県の一部などで使われている) といった言葉が出現し、近隣の地域の方言では [r^hu:ʃi] (佐賀市など) や [ʃu:ʃi] (肥前地方など) と発音されている。

そしてついに、いくつかの方言においては母音文字の同化が広がり、その結果 [niɲiʃi] → [ni:ʃi] → [niʃi] という一連の変化を遂げたのである。これこそが、現代日本の共通語における虹の概念を表す言葉の起源であると考えるのである。

その他のすべての言葉について、琉球地方の方言ではどのように表現され、理解されているのか詳細に討議することはしないが、これまでに紹介した事例に基づく次のようなことが言えるであろう。それは、ここで紹介したあらゆる言葉の集合体は、お互いに絶えず関わり合いながら、「這うもの」(日本語の「ヘビ」を意味する [hebi]、石垣島の「ヘビ」を意味する [pabu]、日本語の「這うこと」を意味する [hau]) の概念、「蠕虫状のもの」(日本語の「ミミズ」を意味する [mimizu]、奄美大島の「ミミズ」を意味する [mø:ʒa]) の概念と「滑りやすいもの」(日本語の [noro-]、[nuru-]) の概念、そして「細長いもの」(日本語の [naga]) の概念の影響を受けているということである。すなわちそれらは、「ヘビ」の特徴を最も如実に表す概念である。¹

¹ 本論文の基本となった考えは、1922年に東京および大阪で行った講演において既に述べたものであり、日本の聴講者に対して日本語で読み上げたものである。

